

あっLOOK

寄居を見て、歩く まちなか情報誌

あっLOOK は、寄居町が発行するまちなか情報誌です。寄居を歩き、町を見て、皆さんのお気に入りを見つけてください。

CONTENTS

- P2 桜花爛漫 P3 春のまちなかを巡るコース
P4.5 Pick Up! 地域おこし協力隊
P6.7 第64回寄居北條まつり
P8 聴かせて! 匠の技



桜

おうか

花

爛

らんまん

漫

春の訪れを感じさせてくれる桜。

寄居町は、桜の名所として親しまれ、

3月下旬ごろから、桜花爛漫なまち並みを

楽しむことができます。

一面に咲き乱れる鮮やかな

ピンク色をつける桜は、

見る人の心を惹きつけます。

寄居の春を探しに、

散策してみたいかがでしょうか。

鉢形城の桜

エドヒガン

愛称 一氏邦桜

町の天然記念物に指定されている鉢形城の桜・エドヒガンは、鉢形城公園内の堀の斜面に力強く自生しており、樹齢は150年を超えるといわれています。エドヒガンの愛称は、この地を治めていた鉢形城主・北条氏邦にちなんで「氏邦桜」と名付けられました。氏邦桜の開花時期は、3月下旬ごろで、日本の代表的な桜、ソメイヨシノより一足先に開花します。一重咲きの淡い紅色が特徴で、笠鉾状に咲き誇り、桜の樹高は約18m、枝張りは東西約23.5m、南北約21.8mと非常に迫力があり、時が経つのを忘れてしまうほど漂々しい佇まいに見入ってしまいます。また、周辺には、町の花である「カタクリ」も自生しており、ピンクや赤紫色をした可憐な花を咲かせます。周辺の散策とあわせてお楽しみください。

寄居町大字 鉢形 2496-2



男衾自然公園

広大な園内に約1,500本の桜が植樹されている男衾自然公園。中でも、淡紅色の花をつける「アーコレード」という品種は、「男衾桜」とも呼ばれています。二季咲きの男衾桜は、春と秋の両方楽しむことができるのも魅力です。山の標高は171mと低く、体力づくりや散歩にもおすすめです。頂上からは、赤城山や筑波山など、北関東にある日本百名山を眺めることができます。また、山一面を彩る桜に加え、カタクリや萩など、さまざまな草木も自生し、自然を満喫することができる公園です。

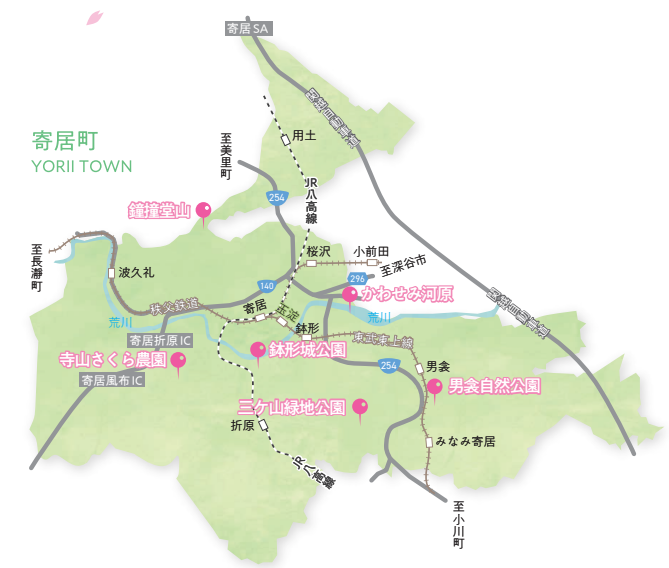
寄居町大字 富田 地内



鐘撞堂山

町の北部に位置する鐘撞堂山は、標高約330mの日帰り登山が楽しめる山として、ハイカーたちに人気のスポットです。鐘撞堂山は、戦国時代に、鉢形城の見張りの山として、敵が襲ってきたときに鐘を鳴らして知らせたことからこの名が付いたといわれています。頂上まで登ると、満開の桜がハイカーたちを出迎えます。頂上には東屋があり、ハイカーの憩いの場となっています。関東平野を一望できる景色と美しい桜の競演は、登山した人のみ味わうことができる特別な風景です。

寄居町大字 桜沢 地内



かわせみ河原

寄居町の中心部を流れる荒川のかわせみ河原は、キャンプやバーベキューなどのアウトドアが一年中楽しめるアクティビティスポットです。かわせみ河原周辺も花見におすすめのスポットで、道路沿いの桜が開花し、訪れた人を温かく出迎えます。川遊びときれいに咲く桜の風景が広がるかわせみ河原の付近には、埼玉県立川の博物館があり、グループや家族連れで賑わいます。

寄居町大字 保田原 321 番先



三ヶ山緑地公園

三ヶ山緑地公園は、埼玉県環境整備センターの敷地内にある公園で、防災調節池の周辺には桜並木が続いており、ウォーキングをしながら桜を満喫することができます。道路を覆うように咲く桜は、まるで桜のトンネル。空を映す池の青色と満開の桜のピンク色のコントラストが美しい景観を演出し、池の周辺に設置されている水辺テラスでは、優しい風で舞い踊る桜並木を鑑賞することができます。

寄居町大字 三ヶ山 地内



寺山さくら農園

折原地区にある寺山さくら農園は、「一年中さくらに出会える町よりい実行委員会」や地域の方々によって整備されています。のどかな風景が広がる農園には、400本以上の大輪の花をつける陽光桜などが植樹され、一面に広がる風景はまさに桃源郷。鮮やかな白やピンクの桜が頭上にまで広がり、来園者を優しく包み込みます。

寄居町大字 折原 地内



＼ 寄居を見て歩く ＼

春のまちなかを巡るコース

寄居町の中でも中心市街地エリアは、見どころがたくさん詰まった場所です。また、歩道が整備され、周辺には案内看板が点在しているなど、散策しやすくなっています。そこで、今回は、中心市街地の春のまちなかを巡るコースをご紹介します。

2 寄居のランドマーク 寄居駅南口駅前拠点施設 Yotteco

ヨッテコ



観光案内所やカフェ、物販コーナー、多目的スペースなどを有し、まちなかの回遊拠点となる複合施設。ウォーキングの前に、観光案内所でパンフレットやチラシを入手しましょう。入手後は、中央通り線を南へまっすぐ進みます。

4 樹齢150年を超える 鉢形城の桜・エドヒガン



笠鉾状いっばいに広がるエドヒガン桜の姿に、思わず目を奪われる美しさ。シーズンになると大勢の観光客が訪れます。

6 ふるさと文学碑歩道 宮沢賢治の歌碑



盛岡高等農林学校2年生の宮沢賢治が秩父地方の地質に関する調査・見学旅行の際に詠んだ歌碑。この地一帯は、古くから多くの文化人が訪れており、周辺には数々の文化碑もありますので、先人たちの歌に想いを馳せてみてはいかがでしょうか。



1 鉄道3線が交わる 寄居駅



東武東上線、秩父鉄道、JR八高線が乗り入れる寄居駅。コースは、南口からスタートです。

3 埼玉の母なる川 荒川



秩父山地の甲武信ヶ岳を源とし、東京湾まで流れる荒川。正喜橋からは、雄大な景色を眺めることができます。

5 七代目松本幸四郎の別邸跡地 雀宮公園



秋の紅葉とは違った景色を楽しむことができる雀宮公園。市街地にありながらも自然を満喫することができるスポットとして地域の憩いの場となっています。

7 旅の終着 玉淀駅



まち歩きの終着は落ち着いた外観が特徴の玉淀駅へ。下りは寄居駅、上りは小川町、池袋方面へと続きます。

Pick Up!

地域おこし協力隊



地域おこし協力隊
Instagram



松本隊員（左）と
内川隊員（右）

空き地所有者の皆様へ

課題と対応の第一歩をサポートします



松本 哲明 Matsumoto Tetsuaki

1975年、神奈川県鎌倉市生まれ。令和5年4月から寄居町地域おこし協力隊に着任。
ミッションは移住促進、創業促進、空き家・空き店舗利活用促進。地元・北鎌倉との2拠点で活動をしている。
☎ 090-3140-4944 ✉ matsumoto.yorii.lvc@gmail.com

僕の地域おこし協力隊としての主なミッションは、次の3つが柱になっています。

▼ 移住促進

▼ 創業促進

▼ 空き家・空き店舗利活用促進

その中でも空き家・空き店舗利活用促進の取り組みについてご紹介します。

■ 空き家を所有することで直面する課題

空き家問題。これが社会的な課題として取り上げられています。ある統計によると、およそ10年以内には3軒に1軒が空き家になるだろうといわれています。残念ながら、寄居町は空き家率が埼玉県でも非常に高い水準にあり、利活用を積極的に考える必要に迫られている地域になっています。

空き家を活用せずに、ご自身で管理したり、あるいは放置したりすることによる主な課題をまとめてみました。

1. 維持管理の負担

空き家を適切に維持するには、定期的な清掃や点検、修繕が必要です。放置すれば劣化が進み、修繕費用がさらに膨らむ可能性があります。維持管理を業者に依頼した場合、年間数10万円の費用がかかります。

2. 固定資産税や維持費用

住んでいない家でも固定資産税が発生します。また、庭木の剪定や除草などの維持費用もかかるため、長期的に大きな金銭的負担になることがあります。

3. 近隣トラブルの発生

空き家は、ゴミの不法投棄や不審者の侵入を招く可能性があります。結果として、近隣住民とのトラブルに発展することもあります。寄居町でも、空き家となっているお宅に空き巣が入ったという話を何度か耳にしています。

4. 活用の難しさ

売却を考えた場合や、賃貸や活用を検討する際にも、修繕やリフォームが必要となるケースが多く、初期費用の捻出が課題となります。これは、無管理の状態が長引くほど、課題が大きくなっていきます。

こうした課題を解決するには、まず家族や共同所有者との話し合いが第一歩です。将来の方向性について意見を共有することで、次のステップが見えてきます。ご自身の年齢やライフステージ、家族の人数などを整理し、「いつ／誰が／どうするのか／そのためにやることは？」といったように、まとめておくことが必要になります。

■ 得意とする領域について

もし、あなたが空き家を所有されているとしたら、その管理や活用について悩んでおられるかもしれません。僕の活動は、主に、その課題を、第三者として状況を整理したり、必要に応じてアドバイスしたり、専門家におつなぎしたりしています。右下の図は、空き家の発生から、売却または賃貸にするという意思決定に至るまでを、時系列で図式化したものです。ピンク色で示した範囲が僕の得意な領域になります。

不動産屋さんとは大家さんの意思決定までのプロセスに丁寧に寄り添うことは難しいのだそうです。不動産屋

さんの事業構造による部分が大きいようです。

意思決定するというのは、意外と心理的な負担が大きいものです。空き家問題となると、事も大きいのでなおさらです。時間もかかります。しかも、方針が決まるまでの期間にも固定資産税などの支出は発生し、草刈りなどの管理も行わなければなりません。この心理的な負担の大きい期間に、困ったらいつでも相談できる人がいる、と感じていただける存在を目指しています（ご相談は無料です）。

この2年ほどで10数件のご相談をいただき、早いケースでは数カ月で活用方法が決まったというケースもあります。

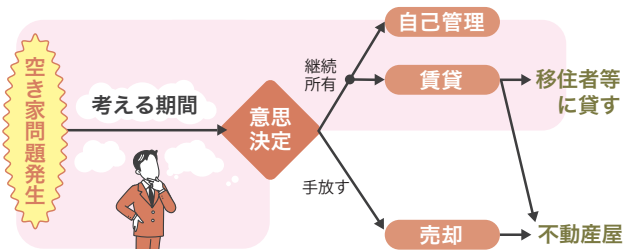
■ 空き家活用第三の道

最後に空き家活用第三の道についてご紹介します。ここが一番の得意分野です。不動産屋さんを経由して、賃貸に出したり売却したりする、という方法とは違った方法です。

それは、移住者や地域で新たな活動をしたい方に使ってもらうことです。この場合、一般的な賃貸などとは考え方が違ってきます。下記の表は、一般的な賃貸と比較をしながら、簡潔にまとめたものになります。基本的な管理は借主に一任します。その分、家賃などは一般的な金額より低く設定します。不動産屋さんを介さずに直接、貸すことも可能です。

経済的利益は小さくなりますが、固定資産税を払って、さらに管理もしなければならぬ、といった状況が止められるメリットがあります。実際に寄居町でも、借主が空き家をリフォームして一棟貸しの宿にしたケー

項目	一般的な対応	利活用希望者への貸し方の例
①家賃	近隣の相場などを基準に決める	固定資産税等が賄える金額に抑える
②給湯器等、重要設備の故障等	大家が対応	借主が対応
③雨漏り、床抜け、白アリ等	大家が対応	借主が対応
④残置物	大家が処分しておく	残置物の処分等は借主が対応することも可能
⑤仏壇・神棚	大家が移設などの対応	借主に日常的な管理を依頼することも可能
⑥借主によるリフォーム	原則NG	借主が比較的自由にリフォームできる



ス、シェアキッチンやカフェとして活用したりする例などもあります。大家さんの負担が減るだけでなく、地域の活性化にも「役買う」こともできてしまいます。

また、僕自身が移住者でもあるので、空き家を求めている移住者などのニーズもお伝えすることが出来ます。これをお伝えすると、空き家を所有されている方から、「気持ちが楽になった」といったお言葉を多くいただいています。

■ 最後に

地域おこし協力隊としての活動の内、今回は空き家・空き店舗の利活用促進の活動についてご紹介しました。本文中でも触れましたが、空き家・空き店舗 Re 活用!!「プロジェクト」と銘打ち、空き家、空き店舗でお困りの皆さんの悩み解決のサポートをしています。



「空き家・空き店舗 Re 活用!! プロジェクト」チラシ

この1月、寄居町の空き家率のことが日本経済新聞で取り上げられました。寄居町の空き家率が、埼玉県内で最も高い水準にありましたが、令和5年までの5年間の調査で、空き家率の低下幅が8都県で最も大きくなったというものでした。この流れに乗って、今後は、「空き家・空き店舗 Re 活用!! プロジェクト」をさらに発展させたいと考えています。様々な立場の方々とチームを作り、寄居町の空き家・空き店舗の利活用の促進を進めていく方針です。

寄居町で紡がれた歴史を見守ってきた建物の再生や価値の再発見を通じて、新旧が調和した街並みを生み出していけたら嬉しいです。

僕自身が寄居町の町内に住んでいます。何かあれば、すぐにお伺いできるという距離感も強みです。空き家や空き店舗でお困りの方から「不安が軽くなった」といったお言葉をいただくのが励みになっています。

ご相談は無料ですので、気軽にご連絡ください。

最後までお読みくださりありがとうございました。





内川 雄生 Uchikawa Yuuki

2001年、東京都板橋区生まれ。令和5年8月から寄居町地域おこし協力隊に就任。
ミッションは魅力向上・集客促進。書家三代目、現代書道家として活動している。

■協力隊活動とアート教育による魅力発信

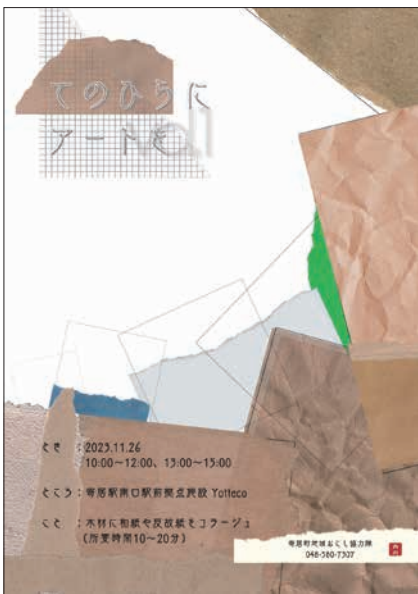
寄居町地域おこし協力隊の内川です。私は協力隊就任時から、地域に根差したアート教育を推してきました。それは着任から一年半が経とうとしている今も変わっていません。むしろこの方向性は町に馴染むだろうとさえ感じています。理由としては、作家が住みつき活動しやすい気候風土であること、そしてゆるつこのんびりした気質であることがあげられると思います。

活動についてのお話に入る前に、生い立ちを少しだけ。私は、東京都板橋区の書道教室を営む家に生まれ育ちました。祖母の代から母が継ぎ、55年余り続く教室です。特筆すべき点として、生徒一人一人が自身の個性と表現に向き合えるように長年母が指導していることです。そして私は、書で独自の作風を編み出し活動の幅を広げています。

話を戻します。非日常を味わえるイベントやお祭りだけでなく、日常的に長く地域に根付くような取り組みをしていくことも必要だろうと思うのです。そのために私が積極的に行ける分野としてアート教育を、と考えました。そしてまず初めにワークショップを開催することにしました。また、手軽さやコンセプトを変えて企画しました。

■これまでに開催したワークショップ 『てのひらにアートを』

協力隊着任後、初めて実施したワークショップです。和紙と木材を使った最もシンプルなスタイルのものでした。短時間でものづくりに触れられる場になったのではないかと思います。また、ここでのワークショップを機に町内に心強い仲間ができたことも大きな収穫でした。ワークショップは特にシンプルな企画であればあるほど、時と場所を選ばずに開催できることも大きなメリットなのではないかと思っています。出張形式での町の魅力発信も可能なのではないかと思案しています。



「てのひらにアートを」チラシ

●『音を、書く』

過去3回開催し、計70名と多くの方にご参加いただいているワークショップです。こちらは書作品を作るもので、日常で見聞きするオノマトペを画面構成や筆具選びまで含め参加者の方々に考えていただき、オリジナルの作品をお作りいただけるものになっています。特に企画段階で注力したことは、作家が常日頃行う「インプット→思考→アウトプット」という脳内での流れを自然と体験できる仕組みを組み込むことです。脳の使い方がわからないと、作品を作ること自体が難しいですからね。書道に対して少しでも親しみを持つてくれたならうれしいです。



「音を、書く」チラシ

●『アートの行為学』

こちらはまた少し、アプローチの異なるものとなっています。それは複数の技法を一度で体験できるというところにあります。アートの制作手法を分化した際に最小のもの、今回は「塗る」「彫る」「書く」「組む」という表現を体験できる場にしました。各

スタイルの作家を招き直接教わり、参加者それぞれが没頭できる表現に出会えることを目的とし企画しました。

従来のワークショップは主催者が作家に依頼する形のものが多く、一歩踏み込んだような企画や作家間での合同の企画は難しいのではと、一つのグループとして取り組めたことはワークショップ運営側としても貴重な経験になりました。



「アートの行為学」チラシ



■今後の活動について

これまでは寄居駅南口駅前拠点施設「Yotteco」を活用することが多かったワークショップですが、寄居町は居住エリアが分散していることもあり、ほかの地区でも開催していけたらと思います。

ワークショップは、より多くの方にアートに触れる機会を増やすために取り組んでおり、今後も引き続き行っていきたいと思っています。また、参加される方の中にはお稽古場を望まれる方もいらっしゃるので、アートも広く学べる書道教室として開塾を検討中です。

また、その一環として町内外の作家のコミュニティ形成の場にしたいです。特に、地方での人の流動性を促すことは大切で、集客の形が必ずしも観光客である必要はありません。そのため、都市部からの人の流れを生み出せることを期待しています。

寄居町に移住し約一年半、ワークショップによって集客を試みるとともに身近な情景に触れられる魅力発信にも心がけてきました。当たり前に潜在化した魅力は案外、外から来た人にとって最も魅力に感じているものではないかと思っています。また、風布にて昨年11月に行ったライブパフォーマンスでは、町や商工会の協力のもと、町内の事業所とコラボをすることで、より実践的な魅力発信ができました。イベント以外では、まだ取り上げられていないようなモノやコトに焦点を当て、SNSで発信しています。このような協力隊や個人の活動を経て、多くの出会いがありました。町の方と接するたびに、温かく見守っていただけであることを肌で感じております。今後もアートを通して没頭できる、楽しい環境づくりをしていければと思います。



Yotteco での観光案内

5月11日(日)開催!!

第64回 寄居北條まつり

町を代表する「寄居北條まつり」は、戦国時代の豊臣軍と北条軍の合戦を再現したもので、毎年5月中旬に開催されています。祭りの当日は、甲冑を着た武者が市街地をパレードした後、玉淀河原で攻防戦や一騎打ちを繰り広げます。その様子は、戦国時代さながらの迫力です。鉢形城三鱗会は、寄居北條まつりを運営する団体の一つであり、主要な団体として長年携わってききました。そこで今回は、はちかたじょうまつりこかい 鉢形城三鱗会の祭事企画部長である北原定行さんにお話を伺ってみました。



■鉢形城の家臣団が結成 鉢形城三鱗会

「お祭りは楽しくなければなりません」そう話すのは、鉢形城三鱗会の祭事企画部長の北原さん。群馬県高崎市出身で、父の影響から、およそ35年以上前に鉢形城三鱗会の会員として活動しはじめ、長年にわたり、祭事企画部長として会を取りまとめています。

「鉢形城三鱗会は、もともと、鉢形城にいわれのある家臣団の方たちが発足した会であり、当初は鉢形城の家臣の供養を目的に『供養祭』が行われました。その後、時代とともに『鉢形城まつり』や『北條まつり』と名称が変わり、現在の『寄居北條まつり』になりました」

鉢形城は、戦国時代に関東一帯を広く支配した北条氏が治めた城で、鉢形城三鱗会の名前の由来は、その北条氏の家紋「三つ鱗」から名付けられたことです。インタビューを行った場所は、鉢形城内にある鉢形城三鱗会の事務所。辺りを見回すと、大將鎧や足輕鎧など、細工が施された甲冑がずらりと並び、この甲冑にほれ込んだ方が、注文を依頼してくるほど精巧に仕上げられています。ほかに、のぼり旗や刀、槍、衣装、ひいては大砲までも手作りというのは驚きです。「材料一つにしてもほとんどが手作りです。北条軍は黒い甲冑であると言い伝えられているので、なるべく当時の

鎧に似たものを作るよう心がけています。また、長時間着られるよう軽量化にも取り組み、攻防戦でも割れないような甲冑を作るといのもこだわりの一つです」と語ります。甲冑や衣装などが破損した場合には、その都度修復を行い、新たに製作もします。「甲冑一つ当たりの製作時間は約20日かかりますが、それがやりがいにつながっています」と語ります。

寄居北條まつりにおける鉢形城三鱗会は、主に大將鎧や足輕鎧、子ども忍者の衣装など約450着以上を管理、修理、製作、貸し出しを行うほか、河原の舞台ステージの設営や河原の整地、町内にのぼり旗や看板の設置を行うなど、幅広く活動しています。

「細かい作業や重労働もありますが、それぞれの会員の得意不得意を見極め、役割分担を行っています。大変なことはありません。楽しいことだらけです」

鉢形城三鱗会には、市街地支部、六供区・風布支部、金尾支部、立原区・保田原支部、折原支部、東京支部など、その地区ごとに支部が存在します。昔と比べると支部数や会員数は少なくなりましたが、現在は約80人の会員が在籍し、祭りの開催が近くなる休日には約40人以上が集まり、活動しているとのこと。また、会を取りまとめるうえで大事なことを伺うと「会の中では、コミュニケーションを大事にしています。年々、会員の平均年齢も上がりつつありますが、和気あいあいと活動しています」と語ります。今後のことを考え、次期後継者の話もしているとのこと。

「50代、60代の方が大勢活躍しています。興味のある方は大歓迎です」



▲1970年代の写真

■毎年進化し続ける寄居北條まつり



寄居北條まつりは、鉢形城三鱗会や寄居町、寄居町商工会、町内金融機関などで構成する「寄居北條まつり実行委員会」が運営しています。新型コロナウイルス感染症の影響により、令和2、3年は中止となりましたが、令和4年は、規模を縮小して11月に延期開催し、令和5年は、5月中旬に戻し、規模を縮小して開催。令和6年の開催では、第63回を迎え、大勢の観客が来場しました。昨年の開催内容を振り返ると、お祭りは、武者隊パレードから始まりました。総勢約500人もの甲冑を身に纏った武者が駅前中央通り線に集結。参加団体は、町内企業や団体のほか、町内小学校の3、4年生が参加する子ども忍者隊、町内中学校の剣道部員が構成する剣道連盟1・2番隊、ほかに、北条氏ゆかりの地の小田原市や八王子市、沼田市、所沢市、上田市、ときがわ町など20団体を超えました。勇壮な武者が隊列を組み、市街地を練り歩きながら玉淀河原まで着くと、信号雷の合図とともにセレモニーが開催され、舞台ステージでは、武士が出陣する際の儀式で総大将が「打ちあわび、勝ち栗、昆布」の3品と酒を飲み干し、必勝を祈願する三献の儀が行われました。その後、見どころである、攻防戦や一騎打ちの開始。白煙が立ち上る中、太鼓の音や爆竹、大砲の轟音が地を這って響き渡りました。豊臣軍と北条軍に分か

れた参加団体が、指揮官や講談師によるナレーションの合図とともに幾度となく攻防戦を繰り広げました。武將同士の一騎打ちも迫力満点。両軍は一進一退の攻防を繰り広げ、盛り上がりが最高潮に達した後、鉢形城の開城ナレーションとともにお祭りは終了となります。お祭り全体の中で北原さんに一番うれしかったことは何かと尋ねると「事故やケガもなく、無事終わったときです」と笑顔で語ってくれました。



ドコースなど、数々の変化を遂げてきた現在の寄居北條まつりの在り方について「毎年同じことをやることは簡単。同じものだとつまらないです。見に来る方が飽きないように、毎年1つや2つ工夫しています」と語ります。実際、昨年は本祭に先立ち、前日の5月11日に「鉢形城跡北条氏邦公入陣行列」を開催。入陣行列が市街地を練り歩き、本祭に向けて町内を盛り上げました。「寄居北條まつりは、神社やお寺など神事が絡むイベントとは違い、任意の団体が始めたイベントなので主催者がしっかり継続していかないとけません。これまで63年もの歴史があるが、まだまだ、みなさんにとって当たり前の祭りになっていません」

現状のものに満足せず、観客に飽きさせない工夫と、進化し続けることの楽しさを追求し続ける北原さん。このモチベーションこそが、さまざまな企画を積極的に実施する鉢形城三鱗会の原動力になっているのではないかと思います。「続けられるだけ、精一杯、頑張りますよ」と力強く答えてくれました。

■他市町村と幅広く交流

鉢形城三鱗会は、一年を通してほかの自治体のお祭りやイベントに参加していると語ります。3月の津久井城まつり（相模原市）の参加から始まり、5月小田原北條五代祭り（小田原市）、滝の城まつり（所沢市）、8月八王子氏照祭り（八王子市）、10月上州沼田真田まつり（沼田市）、北条氏照まつり（八王子市）、11月嵐山まつり（嵐山町）、八王子いちよう祭り（八王子市）など、数多くのお祭りへ出向き「寄居町にある鉢形城のPRを行うほか、甲冑を着用して火縄銃の演武や居合切りの披露を行い、他団体と親睦を深めるなど、交流を行っています」と、広く活動しています。火縄銃や大砲などの火薬を使用する際は、当然のこと、日本煙火協会の資格を有した会員が取り扱っており、よりよいパフォーマンスのため、定期的な射撃場での練習も欠かせません。また、居合切りにおいては、本物の日本刀、いわゆる「真剣」を使用し、巻き藁を3度にわたって切りつけます。スパッと切り落とされるシーンは、切れ味が鋭い日本刀を感じることができます。

■駅前イベントの実施

町では、中心市街地の賑わい創出につながるイベント等の取り組みに対し、1団体につき、最大20万円を補助する「寄居町中心市街地賑わい創出事業補助金」を実施しています。これまで多くの団体に活用されてきましたが、鉢形城三鱗会もその補助金を活用した団体の一つです。令和5年9月から令和6年3月に計6回実施した「駅前フリマ」では、賑わい創出交流広場YORIBAにおいて、甲冑を着た武者によるにぎやかしや新鮮野菜、惣菜パン、古着などを出品し、多くの人で賑わいました。また、令和6年6月と9月に、甲冑を着て町内を散策する「古城の町よりい甲冑ウォーク」を開催。参加者を募集し、甲冑を着ながら正龍寺や鉢形城公園などを練り歩くなどして、歴史に思いを馳せました。ほかにも、令和6年12月には「参式六五市甲冑とちつき」を実施し、甲冑武者とのじゃんけん大会やもち、骨董品の販売が行われました。このように、お祭りに携わるだけでなく、さまざまなイベントを企画し、実施する北原さん。「お祭りを行っていない時期にイベントを開催することで、鉢形城三鱗会をもっと知ってもらいたいです。やることに意味があるんです」と熱い想いを語ります。



関東屈指の名城 | 鉢形城

荒川と深沢川に囲まれた断崖に位置する「鉢形城」は、文明8年(1476)、山内上杉氏の家臣であった長尾景春が築城したと伝えられています。その後、北条家の3代・北条氏康の5男として生まれた北条氏邦が、当時の武蔵の豪族・藤田氏の婿養子として迎えられ、この地を治めることとなりました。氏邦は、藤田氏から譲り受けた地と鉢形城を関東支配の重要な拠点としてとらえ、大幅に拡充し、その後、群馬県南部まで勢力を拡大したといわれています。また、真田昌幸との争いの地点であった名胡桃城の城主に偽りの書状を送り、その際に落城させるなど、策略家としての一面もありました。

ところが、豊臣秀吉による天下統一が進む天正18年(1590)、名胡桃城の事件を機に、前田利家・上杉景勝らが率いる豊臣方の大軍勢が、鉢形城を目指して進軍しました。迎え撃つ氏邦を筆頭とした鉢形衆の兵力はわずか3,500人。その中には、百姓や町民まで含まれていたといわれています。しかしながら、北条軍の戦意は高く、自然の要害を活かした鉢形城は容易に落城しなかったため、業を煮やした豊臣秀吉は、度々増援を向かわせ、豊臣軍は総勢約50,000人余りに達することとなりました。北条軍はわずかな兵力で奮戦し、戦は1カ月余りに及びましたが、城兵の命を守ることを条件に、開城することとなりました。

鉢形城は、平成18年に「日本100名城」に選定され、現在では、鉢形城公園として、四脚門や堀、土塁などが整備されています。



所の周辺を見回すと、今年の祭りで必要な道具の準備が着々と進められており、開催に向けた士気が高まっているのを感じました。第64回寄居北條まつりに向け、甲冑武者の勇ましい足音が聞こえてきます。



北条氏の家紋

聴かせて!

匠の技

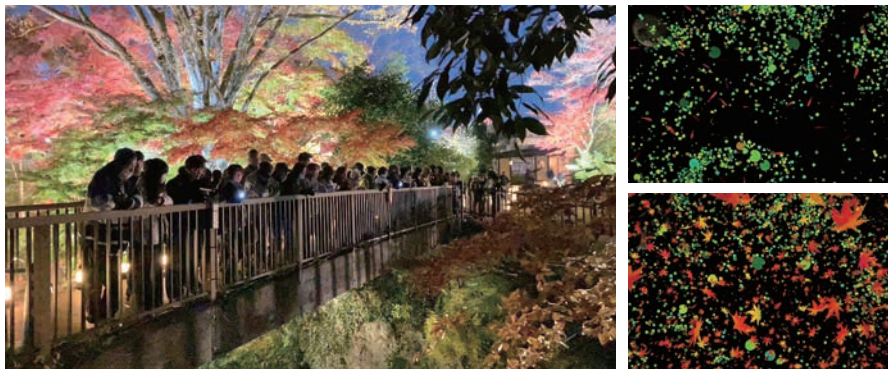
昨年の11月下旬、紅葉が見頃を迎えた雀宮公園ライトアップイベントの新たな取り組みとして、プロジェクションマッピングが行われ、多くの方から大変にご好評をいただきました。今回、そのプロジェクションマッピングに携わり、幅広い技術を活用し、ものづくりやサービスを提供するSandRoomの西沢直樹さんにお話を伺いました。

PROFILE 西沢 直樹さん Nishizawa Naoki

SandRoom(旧:ミツバチ鉄工所)の代表。現在は、町内在住。プログラミング、金属加工、溶接、木工など幅広く行う。



SandRoomの代表である西沢さんは長野県長野市出身で、以前はプログラミングなどのIT系の仕事をしていたが、寄居町の自然が自分の故郷の風景と重なるものがあり、とても魅力的に感じたことがきっかけで、3年ほど前に寄居町に移住しました。現在は、映像体験などのプログラミングのほか、金属加工、溶接、木工など、ものづくりに関する取り組みの傍ら、大学の非常勤講師を務め、知識や技術だけでなく、創ることへの熱意や想いの大切さを教えています。



昨年の11月下旬、モミジやイチョウなどが紅葉し、見頃を迎えた時期に合わせて行われた雀宮公園のライトアップ。西沢さんは期間中に「プロジェクションマッピング」を手掛け、大勢の観客を魅了しました。

「雀宮公園のプロジェクションマッピングでは、最初、園内の大きな岩の壁面に投影しようと思いましたが、地面を照らす方がはっきりと反射して、色が鮮明に映し出せたので、もみじ橋の上から投影することに決めました」と語る西沢さん。屋外での投影は今回が初めての試みで、上手く映るポイントを探すために何度もテストを繰り返し、位置を決めました。地面に写し出された映像は、風に乗って舞い散る桜の花びらや鮮やかな紅葉など四季を感じる水面。その中を優雅に泳ぐ金魚、時折水面に映し出される葛飾北斎やフェルメールなどの名画は、まるで水面の美術館のようでした。「プロジェクション(投影・映写)は、自由度がとても高いものなのですが、映像を全体的に明るくしすぎると見せたいものが見えにくくなったり、スピードを早く動かしすぎるとストーリーがお客様に伝わらなくなったりします。そのため、何度も調整を繰り返さないと良い映像を作ることが難しいです」とプロジェクションの制作について説明してくれました。また、西沢さんのプロジェクションは映像とあわせて、音楽が見事に調和し、非日常的な空間を演出しました。音楽についても「見る人により臨場感を感じてもらえるよう、プロジェクションに合う音楽を生成AIで作り込み

ました」とこだわりが詰まっています。繊細に躍動する大迫力の映像に惹きつけられた大勢の観客は、鮮明に映し出される映像に「おおーっ」と歓声を上げるなど、大いに盛り上がりました。

関係者と協議を重ね、完成まで1カ月以上かけて納得する作品を作り上げた西沢さんは「保育園での思い出づくりに、園児たちにプロジェクションマッピングを見せないか」と、知人からもらったその一言がプロジェクションマッピングをはじめのきっかけとなったとのこと。「コロナ禍で、園児たちが気軽に遊びに行けない時、何とか思い出づくりに貢献したいと思いました」と当時を思い出します。プロジェクションマッピングといえば、単に映像を対象物に投影するイメージがありますが、「ただ映像を見るだけではなく、一緒に遊んで体験してもらいたい」との想いから、固定的な映像ではなく、園児たちの動きに反応して映像が変わるものを製作しようと考えました。これまでの経験を基に、試行錯誤を重ねた結果、大きさの違うカラーのボールが跳ね上がる“バウンシングボール”や上部からボールがランダムに落ちてくる“ボールプール”、園児たちが描いた絵が生き生きと泳ぎだす“スイミング”などを考案しました。また、音の演出では、ピアノの演奏や劇のナレーションを織り交ぜるなど、園児たちが聞いて親しみのある曲を取り入れました。その結果、園児たちの反応は、大満足。「みんなの笑顔を見ることができて、とてもうれしかったです」と、満面の笑みで話してくれました。

現在も、「映像体験」の分野でクリエイティブに活動する西沢さんに、今後やりたいことを伺うと「機材が整っているので、いろんな場所でプロジェクションを投影することが可能です。普段見ることができない人にもプロジェクションによる映像を体験してもらいたいです。また、仕事を通して、クリエイティブな人を増やしていきたいです。SandRoomでは、ものづくりや映像に関連した技術や知識を教えるワークショップの開催も行っていきたいです」と、意気込みを語ってくれました。プロジェクションは、アイデア次第で可能性は無限大。見る人々を魅了し、多くの感動と驚きを与えてくれる夢のある表現です。これからも、素敵な空間を演出する西沢さんの活動を楽しみにしています。



西沢さんの作品「SandRoom」

編集後記

まちなか情報誌『あっLOOK』第7号を手にとっていただきありがとうございます。こちらの情報誌の作成を通して、寄居町には、美しい観光資源や熱い思いを胸に活動している方たちなど、たくさんの魅力を内包していることを再認識しました。特に今回の取材で、寄居北條まつりやプロジェクションマッピングなど、さまざまな方法で精力的に活動する方とお話して、仕事や活動に対する情熱を感じるなど、私自身も学ぶものが多い取材となりました。発行にあたり、取材にご協力いただいた皆さまをはじめ、たくさんの方にご協力いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。引き続き、町の魅力発信に尽力してまいりますので、今後ともよろしくお願いします。

